

ONE

CE//Another=Blue=GODD

すくのすくお

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日突然、海軍や海賊等分け隔てなく、全ての海へと衝撃を走らせた常識外れの大事件――

それと時を同じくして、とある島へと一人の少女が漂着する。記憶喪失らしい「彼女はただ1つ記憶に残る言葉「ラフテル」を追い求めて旅を始める。

彼の名は「フラッグ・C・オーシャン」。

――職業「冒険家、兼、邪神のアンテナ」

――能力「カミカミの実・モデル『クトウルフ』」

# 目次

オリジン／／現れた「神殿」	1
フラッグ／／アウエイキング	7
SAN／／ブレイク	14



# オリジン／／現れた「神殿」

「本部より入電——っ!!! 現在!!! 目標は軍艦5隻を破壊!!! その後破壊した船を「大きな触手で」海中へと引き摺りこみ沈黙!!! 乗船していた海兵の生存は絶望的と思われます!!!」

「ふむ……こりやあ困った事になったわ。クザン、お前ならアレをどうする……?」  
 「おー……ありやあ正面から殴り合うのはよした方がいいんじゃないかな? あの「神殿」とそれを守る「触手」にや悪魔の実の能力がさっぱり通じないのがなあ……まるでありや——

——海そのものみたいなもんにしか見えませんよ」

薄暗く、焦りと困惑の感情が、怒号と悲鳴が飛び交う海軍本部の特別司令室。映像電伝虫の中継がモニターに映し出されているが、そこに映し出されていたのは「不穏、不気味、観た者の正気を尽く削る様な禍々しい神殿」と「それを守る様に海から生えていく沢山の蛸の脚の様な触手」、「それに破壊される軍艦」、「泡を吹く、自分の手足を貪る、海へと自ら身を投げる……などと言った様な発狂をする海兵達」……と言った、正しく悪夢の様な光景が映されていた。

それを見て頭を抱えるのは海軍の中でもトップに位置するセンゴクと「青雉」クザン。今まで培ってきたどんな経験にも当てはまらない、「常識の外からの脅威」には対処という対処が出来ず、手も足も出ない、出せない状況へと陥っていた。

時はルフィ達が砂漠の王国を巡る冒険を終えた辺り。突如世界中へと知らされた異例の「海軍からの警告」。

ある者は興味を。ある者は恐怖を。ある者は怒りを覚えるその文章。

『海軍より告ぐ。新世界に出現した「神殿」には何者も手を出してはいけない』と。

海軍の、この世界の「正義」直々の敗北宣言。それに対しての衝撃は全ての海を揺るがし、それと同時に「神殿」は「ゴールド・ロジャーの遺した宝」と並ぶ程の神秘として世界へと知らされたこととなった。

あたまがいたい。

めのまえがまつくらだ。

からだがうごかない。

おなかもすいた。

「じ——ぶか——！」

なんかきこえる。

「だい——ようぶ——！」

うるさいなあ。

「大丈夫か——っ!!」

あたまがはたらかないなあ。

「船長！こいつ意識がありますぜ!!身よりも無さそうだし顔も整ってら！奴隷にうってつけじゃねえか!!」

「んんんんんん！こいつあ上々じゃないの！シャボンデイのマーケットで高値で

売れるぜ〜〜〜!」

すごいうるさいし、おなかもすいた。

「ほらほら嬢ちゃん!とつとと目を覚ましてこの「ハイエナ海賊団」の資金源になりなよ〜〜〜!!」

つめたつ……みずかけられた。むかつく。

「おつ!船長!!こいつ目を覚ましましたぜ!!立ち上がって……つ!!」

そうだ、ごはんならここにがあるじゃん。

「なつ……なにイ〜〜!!?こいつ!!能力者だったのかあ〜〜!!?」

えーと……あれ、なんのためにここにきたんだっけ……おもいだせないや……

「ヒツ……ヒイイイ!!?!!」

「あはまなたはらまあほもやなたはおなやさはつらたかたはウヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ」

「ウキヨキヨキヨサキヨキヨキヨキヨ」

「15467952467918437914……ブツブツ」

「そらきれい!!!つちおいしい!!!たのしい!!!」

「なに〜〜!!?どうしたお前ら〜〜!!?!!おい!!!小娘!!!俺の仲間に一体何を……なんだ……なんだお前の眼は……お前は……おま……!!!」



ちよつといかくしたらこれだよ……つまんないの。

「し……触手……!?蛸……!!?!?!?!これじゃあまるで……アレみたいじゃないか……!!?!?!」

まあいいや。おなかすいたし……

「ヒツ……やめ………食べ………な………」

うん、まずいや。

「アパパパパピピポピポアア!!」

「きれい……たのしい……さむい……」

「245167983194……アアア!」

ふう、食べた食べた。

やっぱり人間食べると思考がクリアになるなあ。

さて、どうしようかな……何も覚えてないんだよなあ……

やっぱりいつもそう、世界っていうのは不公平だなあ……

———そう言うと、瓦礫と血溜まりを背にして少女は歩き出した。

ウォーターセブンの近くの島にて起きた怪事件。海賊団が丸ごと殺られるのは時々発生するのだが、死体だけが綺麗に消えているという常識外の事件。その話題で持ち切りの街中をフラフラと歩くのは10代後半に見える少女。

ボロボロの赤いジャケット、ボサボサの青い髪、深い闇を映す暗い瞳。

——その名も「フラッグ・C・オーシャン」。この世界に訪れた「邪神」の破片、兼、「ワンピース」を求める冒険家である。

## フラッグ／／アウエイキング

うーん、おなかすいた。ビタミンと糖が足りない。

海の中で大きな魚……魚？みたいなのをおやつにしたからいいけど……。

あんな魚、私の知識には無いんだけどなあ……。

……なんか……ねむいや……。

裸足にボロボロの服、ボロボロの髪で只管どこへ行くわけでもなく彷徨うフラッグ。人間（ハイエナ海賊団）や魚？（※海王類）を食べてエネルギーを補給したはいいが、それでも動けるギリギリほどの量しか回復出来ておらず。

丁度、ウォーターセブンの造船ドックの外れの辺り……瓦礫が流れ着く海岸まで辿り着いた時に活動の限界を迎えてしまったのだ。

意識を失い、崩れ落ちる様に倒れたフラッグ。倒れる時に瓦礫に頭をぶつけてしまい、頭からは血を流している。

だるい……ちからもはいらない……いあ……いあ……

「そこのお前！大丈夫か!?意識はあるか!？」

「おなか……すいた……」

にんげんはそんなにおいしくないから……いまはいいや……  
ぐう。

たった今行き倒れたフラッグをみつけ、直ぐに救助活動に移ったのは瓦礫を捨ててに  
来た船大工。ロープ使いのパウリーだった。

「なんだ……？怪我してると思ったが……」「血が流れた跡」だけあるが傷口が見つ  
かないし……やけに安らかに眠ってるぞ……??まあいい！とにかく病院に連れて行く  
ぞ！」

うーん、うるさいなあ

あれ、どこどこだろ

「目が覚めたのか！見たところ怪我は無いようじゃが……」

「おなかすいた……どこどこ……？」

「ここはウォーターセブン、その造船所の事務所みたいなことじゃ」

「あなたは……だれ？」

「ワシの名はカク。この街で働く船大工じゃ」

「そつか。おなかついた」

「イマイチ話が嘯み合わんのう……丁度晩飯時じゃ。飯に連れて行つてやろう」

目覚めたフラッグのケアを（パウリーからの報告を受けたアイスバーグがたまたま仕事終わりのカクを見つけたせいで）一任されたのは、四角い鼻と古めかしい語尾が特徴的な船大工、カクだった。

「やったー」

「ところでお前さんの名は何というんじゃ？こころじゃ見ない顔じゃが……」

「フラッグ。フラッグ・C・オーシャン。邪し……」

あ、邪神ついていっちゃだめなんだっけ

「旅してるんだけど……ちよつと体力の限界が来ちゃって……倒れてた」

「若いのに苦労してるんじやのう。ほら、今の時間じゃと近くに旨い水水肉の屋台が来てるころじゃ。それ食って元気になるといいんじやがなあ」

わーい。

そう言つて、ケアを押し付けられたカクと運良く助けられたフラッグは、夜のウォーターセブンでカクの財布に大打撃を加える程の量のグルメを楽しんだのだった。

この間までのボロボロだったフラッグとは見違える程に、服や靴、髪の手等身をを整えられたフラッグが居た。

2日後。

あの後、行く宛てが無い事を話したフラッグはアイスバーグの屋敷で面倒を見てもらえる事になり、秘書のカリファから（半ば愛玩動物の様に）可愛がられた結果、こうして一端の美少女と言っても過言では無い見た目に整えられたのだった。

フラッグ自体も、見た目によらない程の馬鹿力でもって船大工達の手伝いをしながら、バランスのいい食事や適度な運動のお陰で最初に流れ着いた時と比べると心身（& 正気）共に一般人レベルまで回復していた。

そんなフラッグは今、船大工の手伝いとして資材を運ぶなどの深く考えることの無い作業を手伝っていた。

「おい!!!  
!!!船大工どもめ〜!!!  
!!!」

「うるせーですねえ」

「おつ、嬢ちゃんは初めてだったかな？ここにやあ時々あんな感じで無謀な海賊が因縁付けてくるんだわ」

「はえー」

「今まで乗ってきた船を捨てて?!より高い金で新しい船を買えだど〜っ?!?!」

パツと見で分かるように、いかにも雑魚と言うような感じの海賊が無茶苦茶に暴れて船大工達を脅して代金を踏み倒そうとしていた。

「さーて、そんじゃあ気晴らしに追っ払ってくるぜ！嬢ちゃんは危ないからここで待ってな!!」

「ふーん、あれは消えてもいい人間なんだね?」

「いやいや！嬢ちゃんそんな物騒な事はダメだよ!!殺さない程度に痛めつけたらあつちは逃げ出すから……って嬢ちゃん?」

なるほど、殺しちやだめなのか

いつの間にか海賊の方へと猛スピードで駆け出したフラッグ。その速度は「六式」の「刺」に届くのではないかと思われるレベルだった。睨みを利かしていた船大工達を掻き分け海賊の目の前に躍り出た彼女は、速度を保ったまま地面を蹴って回転をつけ、船長と思われる一際目立つ男を蹴り飛ばした。

「「「せつ……………船長ーっ?!?!?」」」

「うっ……………あがっ……………ぐっ……………」

「「「じよっ……………嬢ちゃん……………?!?!?」」」

「いえいー!」

ふんす、とガッツポーズを決めたフラッグ。その瞬間、子分A（仮名）がフラッグへとピストルを向け……………そのまま胸を狙って発砲した!

……………のだが、銃弾は身体へと届く事は無かった。彼女の袖の中からずりりと伸びた「禍々しい蛇の触手」が銃弾を掴み、握り潰したからだ。

海賊・船大工共々白目を向き、鼻水を垂らして酷く驚いた空気が流れた。漫画ならこのシーンは見開き2ページでドン!!!となっっているだろう。

「殺しちやだめ……………殺しちやだめなんだよね……………?」

「ヒッ……………!?こいつ能力者かよオツ?!?畜生!船長の仇だ!!!殺っちまえーっ!!!」

海賊達は無謀にも、各々の武器を構えてフラッグへと駆け出し、襲いかかった。

船大工達も工具や武器を構え、海賊達を迎え撃とうとしたが……………

「……………おなかすいたし、そろそろつかれてきた!」

「……………ヒイツ?!?!」

ギン!とフラッグが赤黒い闇に染まった目で海賊達に睨みを効かせた瞬間、海賊達





## SAN//ブレイク

数日後、(いつの間にか結成されていた)「ガレーラカンパニー・お嬢見守り隊」の代表(に任命されてしまった)カクから数百ペリー程の小遣いを貰ったフラッグは、今日も今日とて賑やかなウオーターセブンの街中をウロウロしていた。彼女にとつては若干耳障りな程の喧騒に紛れながら屋台でつまみ食いしてみたり、気のいい老人に釣り竿を借りて釣りをしてみたり……(時々様子のおかしい禍々しい魚が釣れたり)と、街の人に愛されながらのんびり過ごしていた。

今日はちよつと大人な気分になりたいなあと思つたフラッグは、たまたま通りすがつた路地裏の小さなバーへと立ち寄つてみたようだ。カランカラン、と景気のいいベルの音と共にバーへと入店すると、フラッグを驚いた様な目で見る牛の角の様な髪型の大柄な店主や四角い海苔の様な髪型の女性客×2、そして……

「アウ！誰かと思えばお嬢じゃあねえか！ここあお嬢みたいな子供にやあちと大人な場所だぜ？ほらガレーラんとこに戻んな！」

青いリーゼントと丸太のような腕が特徴的な、この街を裏で仕切っている裏番長的な存在として有名な男。「フランキー」が居た。

「よっ」

「よっ！じやないわいな！」

「おっちゃん、フランキーがのんでるのとおなじやつちよーだい」

「ハハハ、お酒はまだ早いけどコーラならお嬢でも飲めるね、ほらどうぞー！」

「せんきゅーべりべりまっち」

なんだこののみのもの……しゅわしゅわしてる……あまいにおい……

グビツ！ゴクツ！ゴクツ！とそれを勢い良く飲み干したフラッグは、初めて飲んだコーラに大層興奮したのか、いつもよりもハッキリとした呂律で店主……ブルーノに向けて

「凄く美味しかった！ありがとうてんちよー！」

と言い、満足気な眩しい程の笑顔で言い放つと、代金分のベリー硬貨をカウンターに置き、わーいっ！と言う文字を幻視する様な姿で店を出て行った。

「……嵐の様な勢いだっとな、お嬢は……」

「元気が良過ぎるのも困りものだわいな」

「……コーラの代金、ちよつと足りなかつたな……」

バーに残された4者はそれぞれ、やんちゃで困った妹分を見るような視線と共に先程までと同じようにいつもの日常へと戻って行った。

が、この瞬間。この街に潜む「闇」が彼女を取り込もうと動き始めた。

バーを出た後、路地裏を横切ったとても大きな猫を追って人気の無い路地裏に迷い込んだフラッグ。特に気にする事はなく猫を追いかけて追いかけて……あつちを曲がってこつちを曲がって……としている内に、大昔に使われなくなった、薄暗いドックへと出てきてしまった。気づけば彼女は、いつの間にかとても広く、全く人気もない、ただただ波の音とウミネコのミャーミャー鳴く声だけが響く空間に一人ぼっちの迷子となってしまうていた。

「あれー、猫はどこに行っただらろー……？」

フラッグがボソリと呟いたその声は、ただっ広い空間にぼんやりと響いて消えていった……が、突如彼女の背後から聞き覚えの無い別の声が響いてきた。

「よう嬢ちゃん……悪いが死んでくれや!! シャウ!!」

「知らないおじさんだーッ！」

「お兄さん!!! シャウ!!!」 「剃」 ツ！」

フラッグが振り返ろうとした瞬間、声の主は姿を一瞬でくらし……猛スピードで彼女を背中から蹴り飛ばした！

「いったー……」

数メートル転がった先で、背中に着いたホコリを払いつつ痛がつているフラッグを見ながら、その男は残忍な笑顔で彼女を見ながら

「俺は四式使い、「海イタチのネロ」だー！アンタにや悪いが、こつちも仕事なんだ……殺すっ！ シャウ!!」

と言い放ち、先程と同じ「剃」を使って距離を一気に詰め……

「決まったッ！」「嵐きや……」

「やめてよ」

「……………ッ?!?!」

一気に勝負をつけようと至近距離で嵐脚を放ち、身体を両断しようとした。だが、出来なかった。嵐脚を繰り出そうとしたその脚は「青白い蝟の触手」で絡め取られ、ただ力の強い少女だと思っていたその相手（殺害目標）の表情は一般人のそれではなく、「人智を超えた狂気、若しくは領域外の恐怖を一点に集めた」表情になっていた。





クッキーを食べ終わり、彼女が最低限「人間らしい思考」を取り戻すと、ドックから港へ……港から海へと駆け出し、そのまま海へと飛び込んだ。

「ただいまーっ」

「ンマー！お嬢どうしちゃったの！ずぶ濡れじゃない！」

「泳いできた！」

（恐らく）能力者なのにどうして海を泳げるんだ？とアイスバーグは夕方やっと帰ってきたフラッグを見ながら首を傾げていた。